

## ポコチン蹴りが趣味のドS女子に仕返し。裸にひん剥き撮影会

「うっ、いってー」

M小学校の5年1組の教室に、男子の苦痛の悲鳴がとどろいた。

「はい、女子いじめた罰だよー」

「うっ、くっ、いてー」

休み時間中の教室で、女子が男子の後ろから突然股間を蹴り上げた。

下から突き上げるように女子は股間を蹴った。男子はその場にうずくまり、倒れ込んでのたうち回っている。

「きゃっはっはっはっ」

男子の股間を蹴った女子、高川純恋は高笑いしていた。

「くそ、俺が何したっていうんだよ」

股間を蹴られた男子が、芋虫の様に体を捻じ曲げ、くねくねしながら言った。

「さっきの時間、プリント1枚足りてなかったのに、自分で取りに行かないで、女子に取らせにいかせたでしょ。だから蹴ったのよ。そんなこともわからないの」

高川純恋の言い分としては、さっきの授業中、先生が配ったプリントが1枚足りなかったのを気付いていたはずなのに、そのまま後ろに回して、女子に取りに行かせたから、股間を蹴ったということらしかった。

「そんなことで蹴るなよ」

男子はまだ股間を押さえたまま、苦悶の表情を浮かべている。

うっすらと涙も流れてきていた。

「男子はわかんないでしょ。そこ蹴ったげないと」

高川純恋は、得意げに男子を見下ろしながら言い放った。

「男子のあそこ蹴るのってめちゃくちゃ楽しいんだよねー」

5年1組の中の教室での出来事なので、クラスメイトのみんなも男子が悶えているところを一部始終見ていた。

男子にとっては、それもまた恥ずかしかった。

股間を蹴られて悶絶している姿を、クラスメイト全員に見られたのだ。

「これからは、気が付いたら自分で先生に言いに行きなさいよ」

高川純恋はそう捨て台詞を吐いて、仲のいい女子たちを引き連れて教室を出ていく。

「純恋ちゃんすごーい」

「ヒーローみたい」

「こんなの楽勝よ」

高川純恋は得意げな表情を浮かべて、女子たちの称賛の声を浴びていた。

「おい、大丈夫かー」

「思いっきり蹴られたな」

他の男子がいたわりの表情を浮かべながら、ポコチンを蹴り上げられた男子の元へと近づいて話しかける。

「マジであいつ容赦ないよな」

「あいつ、俺らのこの痛みがどれほどのものかわかってないだろ」

高川純恋は、ことあるごとに男子の股間を蹴っていた。

男子たちが何か悪さをしたときや、先生の言うことを聞かなかったりしたときに、高川純恋が後ろから突然股間を蹴ってくるのだ。

たまには前から蹴ってくることもあったけど、基本は後ろからゆっくりとバレないように忍び寄って行って、蹴り上げるやり方だった。

当然、男子たちにとっては、不意打ちの急所攻撃となる。

高川純恋は本気で股間を蹴っていた。

男子の、男にしかない急所を目掛けて、力いっぱい右足を蹴り上げた。

高川純恋のポコチン蹴りの被害に遭った男子はかなりいた。

もう、すでにクラスの中で、6人が被害に遭っており、今日、蹴られた男子で7人目だった。

「やっと、痛みが治まってきた。でも、まだ痛い」

うずくまっていた男子が、体を起こしながら言った。

「大丈夫かー」

主に自分も蹴られたことがある男子が、労りの言葉をかけ続ける。

男と女の明確な違いはいくつかある。

その1つがポコチンがあるかないかだろう。

そして、ポコチンを蹴られたら、球を蹴られた

ら、男子は激痛に襲われる。  
ポコチンの痛みはポコチン独自の痛みだ。  
他の痛みとは、ある意味比べ物にならない激痛がある。  
男はポコチンという明確なわかりやすい弱点がある一方、女子にはポコチンのような明確な弱点はない。  
そういったことも、男女の身体の違いといえるかもしれない。  
高川純恋はある意味で、その違いを一番実践的に使っているともいえた。  
「高川のやつ、覚えてろよ」  
ようやく立ち上がった男子が、静かに燃えるようにそう言った。

その日の放課後。  
高川純恋にポコチンを蹴られたことがある被害者の男子が 7 人全員で集まって話し合っていた。  
「高川に復讐してやろうぜ」  
「そうだよな、ポコチン蹴るとかありえないんだよ、あいつ」  
「俺らの痛みがどれくらいの痛みかをわかってないんだよ」  
被害者の男子たちは、高川純恋に仕返しをすることにした。  
「でも、どういう仕返しがいいだろう？」  
「そうだよなあ。女子にはポコチンはないし」  
男子たち 7 人は考えをめぐらせる。

「なあ、高川に痛みを味合わせるっていうよりは、恥ずかしさを味合わせるっていうのはどうだろう」

「恥ずかしさ？」

「そう。俺らポコチン蹴られて痛くて、しばらく動けなくなるじゃん。で、その様子を近くにいるやつにずっと見られて恥ずかしかったじゃん。だから、そういう恥ずかしい目に高川を遭わせてやるのがいいんじゃないかと思って」

「それいいな。確かに、高川は女子だから、同じ痛みを味合わせることはできないけど、恥ずかしいことなら味合わせることはできるな」

「いいなそれ。それでいこーぜ」

「恥ずかしさを味合わせるんだったら、かなりきついことをやらせようぜ。ポコチンの痛みと同じくらいじゃないとダメだ」

「そうだなあー。なんかいい案あるか？」

「女子にとって、恥ずかしいことっていったら、やっぱ、男子の前で服を脱がされることだと思うんだよね」

「そういう系か」

「うん、それしかないと思う」

「でも、そういうのってけっこうヤバそうだよな。バレたら後から問題になりそうじゃない？」

「そうならないようにさ、スマホで撮影とかしといて、先生に言ったり、親に言ったりしたら、これネットにバラまくぞって高川を脅しとくんだよ」

「それいいなー」

「いやー、それけっこうヤバくない」

「大丈夫だって。しっかりとチクらないように高川を脅せば」

「そうだよな。あいつは俺らにそれだけひどいことやったんだから。同じくらいのことは受けてもらわないとな」

「そうだよ。あいついっつもえらそうなんだよな。いきなりポコチン蹴ってくるし」

「でも高川って結構かわいいよな。クラスの中でもかなりかわいい方だよな。そんな高川の服脱がすのって、ちょっと俺楽しみかも」

「まー確かに、かわいいうちやかわいいよな。っていうか、俺的にはクラスで一番かわいいと思ってる」

「お前、もしかして高川のこと好きなんじゃない？」

「いや、それはない。あんな暴力女。でもかわいいのは認めるよ」

「で、作戦はどうするんだよ」

男子たち7人は高川純恋への仕返しの計画の作戦立案に入っていた。

「高川ー」

男子が掃除の時間に、高川純恋に声をかけた。

「何？」

高川純恋が男子の方を振り返る。

「今日の放課後さー、体育倉庫に来てくれない？」

「どうして？」

「なんかさ、2組のとあるやつが、高川に言い

たいことがあるから放課後、体育倉庫に呼び出してくれって頼まれてたんだよ」

「2組の？2組の誰よ？」

「いや、それはまだ言えない。言わずに呼び出してほしいって頼まれてんだよ」

「用はなんなのよ？」

「さあー、俺も詳しくは聞いてないんだけど、たぶん告白とかなんじゃない」

「ふーん」

高川純恋は腕組みをして少し考え込んだ。

「なんかあんまり気が進まないけど、まあ別に行ってあげてもいいよ。今日は習い事もない曜日だし」

「そうか。ありがとう。じゃあ、放課後、必ず一人で体育倉庫に来てくれよな」

「一人で？まあ別にいいけど。っていうかさ、体育倉庫って、勝手に入っていいところなの？」

「大丈夫大丈夫。あそこいつも鍵空いてるんだよね」

「そうなんだ」

「じゃあ、放課後頼んだぞ」

放課後。

高川純恋は約束通り一人で運動場の端にある体育倉庫にやってきた。

ゆっくりと重い扉を開けて、中に入った。

薄暗い体育倉庫の中には誰もいなかった。

(何よ。誰もいないじゃない)

そう思った高川純恋に向かって、跳び箱の後